
慈雨姫

日野五十鈴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慈雨姫

【Nコード】

N3799V

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

坊やは雨が大嫌いでした。「どうしてこんなに雨が降るの?」そんな子供に、おじいちゃんが語り聞かせた雨にまつわる昔話。旱天慈雨の女神「慈雨姫」の、優しくも哀しい愛の物語です。

【12話完結シリーズ第11段!!】

慈雨姫（１）

今日も晴れないね。てるてる坊主を軒下に吊るしながら、男の子が振り返ります。

男の子は、夏になると毎日のように降る雨が嫌いでした。外に遊びに行けないし、もちろん暑い中を川や海で泳ぐこともできないからです。大好きなお星様も見れません。

「なんでこんなに雨ばかり降るの？」

頬を膨らませながら訊けば、おじいちゃんは笑います。

「慈雨姫が夫に会いに来るからだよ」

「じつひめ？」

知らないのかい？ おじいちゃんは読んでいた本を置き、男の子を手招きして膝の上に座らせます。

よし、だったら聞かせてあげようか。

昔々、ぼつやはもちろん、この老いばれさえまだ生まれてなかった頃。

夏に雨が降るところか、世の中が業火に吞まれそうになった頃の話

だよ。

慈雨姫（2）

世界は最初、大雨も干魃もなく、人も動物もみんな幸せ一杯、とても仲良く暮らしていました。

一年中がいつでも春で、食べ物も満ち足りて平和が溢れていたからです。

しかし平和はそういつまでも続かないもの。

いつしか世界には暑さ寒さの四季が出来、人々は自分で畑を耕し、せっせと作物の取り入れをしなければならなくなりました。

こうなると人の物を盗んだりする者も現れてきて、何かと争い事が起こるようになってきます。

人々が争うのを見た神々は呆れて、次々と天に帰っていきました。けれど雨の神と地の母の子、聳禹^{しやうう}だけは望みを捨てず、下界に踏み留まって平和を人々に説きました。

それでも人間は武器を作り、他所の国を攻めたり友人同士戦争をするようになりました。

流石の聳禹も心を痛め、蒼い鱗を持った龍となって天上へと昇り、地上に程近い北の空で星になったのです。

けれども聳禹には天に昇ってもなお、人を信じる心が残っていたのでしょうか。

ある日、聳禹は小さな孤島で、1人の子供が泣いているのを見つけます。

生きたいと願い、無力を嘆き、それでもなお世界を変えたいと泣く子供でした。

子供の純粹で誇り高い願いを聞いた聳禹は、1匹の蒼い獣を孤島に遣わせます。

鹿の体に馬の蹄、牛の尾と獅子の鬣、額に一本角という奇妙な獣ですが、虫も殺さず草を踏み潰すことも厭がるほど優しい獣。けれど利口で主人の言うことをよく聞き、味方にすればこの上ない相棒となるはずです。

しかし子供はその不気味な姿に恐れをなし、手当たり次第に物を投げては追い払おうとします。優しい獣は逃げようしましたが、子供の投げた石が右目に当たり、崖から落ちて海へと沈んでしまいました。

それを見た聳禹は嘆き悲しみ、この憐れな優しい獣を天に召し上げ、星に姿を変えて弔いました。そして二度と地上には降りないことを誓いました。那由多の時を重ねて、人間が緑の大地を焼き払っても、ただ凍える夜空から静かに見下ろしているだけでした。

長い時を経て、1組の男女が世を変えんと立ち上がる、そのときまで。

慈雨姫（3）

那由多の時を重ねてもなお、緑の大地を焼き尽くす戦火は止まることを知りません。それも、烈火暴君の時代になると火の勢いは増すばかりでした。

誰もが時代を憂える中、一組の男女が世界を変えるために立ち上がります。

迫り来る炎と戦いながら、いつ終わるとも知れない旅に出たのです。

その姿に心を打たれ、もう一度だけ気まぐれを起こす気になった聳禹は、自らの蒼い鱗を7枚剥がして娘たちを産み出し、2人の元へ遣わせました。

蒼鱗七娘は上から名を、芍薬、牡丹、桔梗、睡蓮、月草、紫苑、竜胆といい、それぞれ父龍から風雲雨露を操る力を授かっていました。

また徳を弁えていた蒼鱗七娘は、2人の手により烈火暴君の後宮へと送られます。これ以上の燃え広がりを防ぐため、また万一火が放たれても直ちに消すことができるからです。

けれども末妹の竜胆だけは、絶世の美女である姉たちに比べて顔立ちがあまりにも凡庸だったため、後宮には入れてもらえませんでした。

容姿が劣るという理由だけで追い出されては2人に合わす顔もなく、かといっていまさら天上に帰ることも許されません。

役目も居場所もなくなった竜胆は、ひとりあてもなく、烈火暴君の炎で灼けた地上をさ迷いました。

飲まず食わず、不眠不休で歩き続け、疲れ果てた旅の果て、切り立つ崖に辿り着いた竜胆は、自ら波を呼び寄せ海に浚われてゆきました。

太陽と月が交互に天を駆けるだけの世界で、深い深い眠りについたのです。

ぼんやりとした意識のまま、在るか無きかの姿だけを留めて、寄せては返す波の中、竜胆は目覚めることなく揺られ流されました。

そうして春は終わり、夏が訪れ、秋を過ぎて冬を迎えた頃。

竜胆は孤島の浜辺に打ち上げられました。

慈雨姫（４）

世界の果てにある孤島には、まだ烈火暴君の炎は押し迫っていませんでした。昼は明るく光に満ち、夜は満天の星が輝いて、ひととせの間に花が咲いて散り、ひねもすの間に潮が満ちて引く。全てが順調に思われました。

その世界最果ての孤島には小さな集落があり、そこに１人の若い漁師が住んでいました。

若い漁師に名はありません。

網を担いで若い漁師は、魚を捕りに朝早く家を出ました。空は鉛色の雲が立ち込めていて、松の林に着いたときには、ちらちら粉雪が降り始めました。

これはついてない。今日は引き返すべきかと漁師は思い悩みました。しかし帰ったところで家族はなく、漁をしなければ明日の食う分に困ります。

見るともなしに若い漁師は、目をぼんやりと松林の先、黒い波の打ち寄せる浜辺へと向けていました。

すると、何やら白いもの…白い何かの上に、海草のような黒い帯状のものがどろりと伸びています。

なんだろう？ 近づくとつれてそれが人だと分かり、慌てて駆け寄れば、倒れているのは若い娘ではありませんか。

若い漁師は驚き、しかし娘にまだ息があるのを見ると、急いで家に連れて帰りました。とはいえ竹の柱は傾き、茅の屋根はボロボロで、その日の炭にさえ事欠く極貧ぶりです。

けれども漁師はありったけの炭を焚いて暖をとり、娘に布団を譲ると自分は台所の土間に筵を敷いて寝ました。漁には出ず僅かばかりの干し魚や煮貝で食い繋ぎ、代わりに藁や竹で細工物を拵えながら、こんこんと眠るばかりの娘を看るばかりでした。

こうして、10日ばかりが経ったでしょうか。

娘はようやく目を醒まします。

慈雨姫（5）

娘が起きて動けるようになるまで、若い漁師は甲斐甲斐しく看病しました。娘は疲労のためか病気のためか、固く表情を閉ざしていましたが、ひと月もすれば笑顔をとり戻し、綺麗な歌声も聞かせてくれます。

ところで、漁師は生まれつき右目の視力を持ちませんでした。名前を持たない彼は、そのことから自分を「片目」と娘に呼ばせます。一方で娘は「竜胆」と名乗りました。

ようやく起きて動けるようになったある日の朝早く、娘は懷から白い紙のこよりを一本取り出し、漁師にこつ頼みました。

「鍋を貸してください」

訳のわからないまま漁師が鍋を持ってくると、娘はこよりを解して中から米を2粒出します。

そして2つの米粒をぽつんと入れ、水をさして火にかけました。なにをするのかと思って見守っていると、煮立った頃合い、2つの米粒は鍋一杯にまで膨らみました。

「へえ、不思議なこともあるもんだ」

島の外の世界を知らない漁師は、その一言で片付けて白いご飯にか

ぶり付きました。娘もただ静かに微笑むだけで、漁師が美味しそうにご飯を口に運ぶのを見ていました。

しばらく向かい合って朝餉を食べていましたが、突然、娘が泣きそうな顔でこう告げました。

「聞いてください。もう、お暇を願わなくてはなりません」

「なんだって!？」

信じられない、という顔で漁師は箸を止め、娘を見つめました、娘は伏せた目を漁師に向けようとはしません。

「大した恩返しもできませんが、こよりの束がまだ沢山残っています。それを解して毎日、ご飯を炊いてください」

「本当に、出ていくのか？」

漁師は困惑してしまいました。娘にはまだ、ひとりで外を歩くだけの体力が戻っていないのです。

「俺といるのが嫌になったか？」

卑屈な考えを口にしてしまえば、今度は娘が慌てて言いました。

「違います、そのようなことは」

「じゃあどうして」

娘は黙ってしまいました。気持ちはありがたいが、そんな風に気を

遣われたら逆に申し訳ない。それをうまく言葉にできなかったのです。

そのまま俯いていると、頭に何かが乗せられました。漁師の手でした。生臭くて、ガサガサしていますが、とても大きく温かい手でした。

「何か事情があるのだろうか？ 無理強いはしないが、休んでいれば元気も出よう。そうしたら、あんたの好きなところに行けばいい」

これではまるで子供扱いではないか。しかし気軽に言われてしまえば、娘にはもう出ていく理由がありません。

この状況がおかしくなつて、娘は赤らめた顔に笑みを浮かべました。

漁師に今まで見せなかった、穏やかな優しい顔に、若い漁師も幸せな気持ちになって笑ってしまいました。

慈雨姫（6）

こうして、娘は漁師の家の暮らしを手伝うことになりました。

孤島の暮らしを知らない娘は、家のことを慣れない手つきで始めましたが、そのうち何でも上手にやれるようになりました。こうなれば難しいこともすぐに覚えてしまい、手際よくハキハキと片付けてしまいます。

「あんたは大した働き者だな」

そう褒めあげて、漁師は始終感心していました。

けれども、そんな娘にあげるものが漁師にはありません。ただ働くだけの生活に嫌気がさして、娘はそのうち出ていくものと思われましました。

ところが、ひと月経ってもふた月が過ぎても、娘は出掛けていこうとしません。これは一体どういうことかと、漁師は始終気にしていました。

娘は、さと言って言いました。

「気になさるな。どうぞ、しばらく私を置いてください」

「この家にか？」

「はい。わたしには、べつに住まいがありません。少し訳がありまして、この島に流れ着きました」

「だが、それは困ってしまう。俺はあんたに着るもの一枚買つてやれない、あんたに感謝は尽きないが、引き留めることなんかできません」

「そんなこと、わたしはちつとも気にしていません」

娘は気軽にそう言つて、漁師の家に住むことを決めてしまいました。娘の決意が固いというならば、漁師がこの娘を追いつ理由などあるでしょうか。

娘は日に三度ずつ、あの不思議な米で美味しいご飯を炊きました。あばら屋住まいに小言も言わず、掃除、洗濯、縫い物と、毎日手まめに働きました。

こうしている間に冬が終わつて、風もいくらか暖かくなりました。青い空から太陽が明るい光を投げてきました。

日を重ねるごとに、漁師の中で娘の存在は大きくなっていました。そしてこの謙虚で温順、働き者で素直な娘を、いつしか妻に迎えたといふ、そう強く思ふようになっていったのです。

慈雨姫（7）

「それで、その娘は漁師のお嫁さんになったの？」

おじいちゃんがひとつ息を吐いたのを見計らい、男の子は顔を覗き込んで尋ねてきます。

男の子のキラキラとした無邪気な笑顔に、おじいちゃんはほろ苦く微笑みました。

「漁師は何度も繰り返し返した。どこにも行くな、一緒にいたい、家族になってくれ妻になってくれ。けれど娘はそのどれにも、首を縦に振ることはなかったんだね」

「じゃあ、お嫁さんにはならなかったの？」

ちよっぴり悲しそうな顔をする男の子。けれどもおじいちゃんはこう続けました。

「漁師はこう思っていたよ。首を横にしか振らないのに、素っ気なくしたり突き放したりしないのは、他に何か理由があるんじゃないかと。だから、誠意を見せて竜胆に決めてもらうことにしたのさ」

「誠意って？」

おじいちゃんは男の子に笑いかけると、雨足の弱まった窓の外へと

目を向けました。

月の天女に誠意を見せるため、貴公子たちは在りもしない宝を探しただろう？

自分は財力もないけれど、それに賭けてみることにした。

貴公子のように「偽物の誠意」を見せれば、やはり姫は心を開かない。そもそも姫に結婚する気がないのであれば、やはり自分の嫁にはならない。

だから自分に出来る精一杯のことをして、彼女の心を知ろうとしたんだ。

その話をする前に、坊やには知っておいてもらいたい話がある。

ほら、あの、生まれつき視力を持たない漁師の右目。

あれにまつわる因果の話だね。

慈雨姫（８）

昔々、世界最果ての孤島には、大地を焼き払う災いの炎から逃れた人々が押し寄せていました。

島民は年寄りや女や子供まで、心身に火傷を負った人々の治療に駆け回っていました。

その中で最も幼い子供は、いつも誰も見ていないところでひっそりと泣いていました。

生きたいと願い、無力を嘆き、それでもなお世界を変えたいと泣く子供でした。

ある日、その子供の前に蒼い獣が現れます。

鹿の体に馬の蹄、牛の尾と獅子の鬣、額に一本角という奇妙な獣ですが、虫も殺さず草を踏み潰すことも厭がるほど優しい獣でした。

しかし子供はその不気味な姿に恐れをなし、手当たり次第に物を投げては追い払おうとします。優しい獣は逃げようとしたが、子供の投げた石が右目に当たり、崖から落ちて海へと沈んでしまいました。

子供は罪の意識から憑かれたようにその場を逃げ出し、すぐにこの獣のことも忘れてしまいます。

やがて子供は大人になって独り立ちし、妻をめとって2人仲良く暮らします。

けれども夫婦には子供がおりませんでした。最後の神頼みに十三夜の月姫にお願いし、ようやく翌年、お産の時を迎えました。

ところが…。

「や、や、やつ」

両親は驚きのあまり顔がひきつりました。

生まれてきた子供は、右目が無惨にも爛れていたのです。両親は色々と手を尽くしましたが効き目がなく、困り果てた末に子供の右目を包帯で隠し、事故による怪我で失明したことにしました。

やがてその子供も大きくなり、人の親となる時が来ました。そして生まれてきた初孫も、やはり右目が爛れていたのです。

代々続く、右目の病。

今や翁となつたかつての子供は、昔の己の罪を思い出しました。

「あの蒼い獣は天からの遣いで、この子たちは祟りで生まれつきの病に冒されたんだ」

しかしいくら己の行いを悔いても、獣が生き返るわけではありませんせん。

その後、かつての子供は獣の落ちた崖に塚を建てました。

それでも一族がその罪を忘れないようにするためか、子供の血を引く男子の誰か1人は必ず、右目が爛れた状態で生まれてくるのだそうです。

慈雨姫（9）

漁師は意を決して、娘を島にある蒼獣塚に連れていきました。

そして島の伝説、獣と子供の話、生まれつき視力を持たない右目について　漁師は、自分がその伝説に出てくる子供の末裔であることを話したのです。

「この話を聞いて、さぞかし気分を害したことだろう。しかし、あなたの気持ちが変わっても、俺のこの目とあなたへの思いは変わらない。俺を嫌いになったのであれば、このまま何も言わず姿を消してほしい。けれどもし、それでも嫌いにならないのであれば…俺の傍にいてくれないか」

あなたに好きになってももらえるように、精一杯努力するから。そう漁師が付け加えた直後、娘の目からはらはらと涙が零れ落ちました。娘も漁師を慕っていましたから、漁師の気持ちが嬉しく、それでも否の返事しか言えない自分が悲しかったのです。

けれども漁師が身の上を話してくれたのだからと、娘も真実を語りました。自分が龍の鱗であること、世界を救う手助けをするために地上に遣わされたこと、烈火暴君に嫁ぐ身でありながら、不美人という理由で追い出されたこと。

それに失望して身を投げたがゆえに、授けられていた不思議の術も

失ったことも。

ところが娘が全てを話し終えても、漁師の気持ちは少しも変わっていませんでした。ただ娘だけを望む誠実な想いに、冷たく凍りついていた娘の心も少しずつ溶けてゆきました。

やがて心は通じ合い、ようやく、2人は結ばれます。

そして1年の月日が経ち、夫婦は綺麗な目をした男の子を授かったのです。

慈雨姫（10）

ところで。

後宮に入った竜胆の姉たち、蒼鱗六娘は、中央から新たに放たれる幾多もの火を消しながら、あの世界を変えんと立ち上がった一組の男女が王宮に辿り着くのを待っていました。

そしてとうとう、烈火暴君は2人の手によって倒されたのです。

役目を終えた蒼鱗六娘は父龍によって天に迎えられ、冬の夜空に輝く六連星となりました。

その頃にはもう、竜胆のお腹には新しい命が宿っていました。蒼鱗六娘は生き別れた末妹の幸せそうな姿に安堵し、晴れた夜空から竜胆とその夫を見守りました。

やがて六連星の季節が終わり、空の日差しが段々に暑く強くなってきました。漁師の暮らしもだんだん楽になっていて、1年もすると、子供も丈夫に育ちました。

何もかもが順調にいくかと思われました。

けれども、幸せはそう長くは続きません。

烈火暴君が倒れてもなお、世界には火が残っていたのです。それは

小さいながらも確実に、少しずつ世界の最果てにある孤島にも押し迫っていました。

世界の果てでは、逃げる場所がどこにありましょうか。

竜胆は毎日、蒼獣塚の前で父龍に願いました。私にもう一度だけ、風雲雨露を操る力を下さいと。

何度も何度も祈りました。

そして竜胆は、自分の魂を天上に返すことで、不思議の力を取り戻せることを知ったのです。

竜胆はその夜、夫に言いました。

「あの子はもう白いご飯で、この先育っていきましょう。こよりの束を、未練の数だけ残していきます。それでご飯を炊いて下さい。どうか私の分まで、あの子を可愛がってあげて下さい」

娘は淡雪のように微笑んで、夫の目を冷たい手の平で覆いました。とろとろと心地よい眠りに誘われながら、最後に五感が捉えたのは、優しく語りかけてくる娘の声でした。

「私は一枚の鱗に戻りますが、旱天慈雨の女神『慈雨姫』として、世界に恵みをもたらすのです。雨が降ったら、思い出して下さいね。日照りの後に降る雨は、貴方がくれた幸せの雫。どうぞ、達者でお暮らし下さい。貴方が魂だけになっても、この世が終わるその時まで、私は一筋の雨となって、貴方に会いに来ますから」

次に目が覚めたとき、娘の姿はすでにどこにもありませんでした。

た。

そしてようやく世界は鎮火され、漁師が蒼獣塚に足を運ぶと。

夏の海辺にあるはずのない、青紫色の竜胆が一輪、花をつけて風に揺れていたのです。

慈雨姫（１１）

「だから、カンカン照りの後にはこんなに雨が降るんだね」

男の子の目はさきほどと違って、キラキラと輝いていました。

この日から、男の子は雨の日も大好きになったということです。

そして男の子は大きくなり、自分もおじいちゃんになると、子供たちにこの話を聞かせてあげるのです。

早天慈雨の女神「慈雨姫」と、昔々この島にいた、君たちのご先祖様の物語。

昔々、君たちはもちろん、この老いばれさえまだ生まれてなかった頃。

夏に雨が降るところか、世の中が業火に吞まれそうになった頃の話だよ。

芍薬は 元さえ光れど 竜胆の
妹が装いし とうとくありけり

（芍薬の花は根元まで輝かんばかりに美しいが、それにも勝る竜胆のような姿をした貴女。私は貴女をいつまでも忘れはしない）

沖つ鳥 魚つく島に 吾が住ねし

兄は忘るまじ 世の悉に

（あの孤島で一緒に暮らし、楽しかった日々よ。私も貴方のことを忘れはしません。一生、この世の終りまで、ずっと）

終

慈雨姫（12）（前書き）

これは本編に載せるつもりだったエピソードですが、読む人を選び
そうなので番外編にしました。

直接的な表現はございませんが、ほんのりR15入ります。苦手な
人はスルーしちゃっても全く問題ありません。

慈雨姫（１２）

娘が漁師と夫婦になることを決めたのは、満月の夜でした。

娘には、漁師と契りを結ぶ前に、どうしても確かめたいことがあったのです。

「お願いでございます。もし私を本当に妻にして頂けるのならば、どうか貴方の右目を見せてはくれませんか」

漁師は左目を伏せました。ずっと隠してきた右目の病。自分でさえ嫌悪を抱くこの目を見せたら、娘に嫌われると思ったのです。

けれど、これから家族として共に生きるのですから、いずれそれを晒すときが来るでしょう。

漁師は覚悟を決めました。無言のまま震える指先で包帯を解くと、月明かりに照らされて、酷く爛れた右の眼が露になりました。

「…醜いだろう…？」

言葉を失った娘を見て、漁師の顔がくしゃりと歪みました。そう、ただ醜いだけではなく、この病は代々続いているのです。もしかしたら、娘が産む子供も…。

けれど娘はすぐに微笑みを浮かべました。そしてその呪われた右目

に、そつと優しく口付けました。

「…私は、貴方の顔だけを好きになったものではありません。貴方のその広い心、優しさをお慕いしているのです」

今度は漁師が絶句する番でした。

「もし病を受け入れられないのであれば、きっと家族を作ってあげることは出来ないでしょう。そのようなことでは、私に人の妻になる資格はありません。貴方と夫婦になる前に、それだけは確かめておきかった…」

娘は一度頭を下げると、再び漁師の両方の目を見据えました。

「気になさるな。どうぞ、私をお嫁さんにして下さい」

改めて娘が口にした求婚に、漁師は返す言葉がありません。答える代わりに照れ笑いを浮かべると、娘を引き寄せ、そつと口付けるのでした。

こうして2人は満月の夜、寄せては返す幸せの波に身を任せ、ついに固い絆で結ばれたのです。

了

慈雨姫（12）（後書き）

い變読ありがとつていました。
三（——）三

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3799v/>

慈雨姫

2011年9月5日16時51分発行